



学校法人福武学園と合併へ

野球とサッカーの強豪・北陽高校が 関西大学第2の併設高校に

学校法人関西大学と学校法人福武学園(大阪市東淀川区、福武道裕理事長)は、2008(平成20)年4月1日を期日として両法人を合併させることについて合意に至り、3月15日、基本契約を締結した。合併後、学校法人福武学園は解散し、同法人が運営する北陽高等学校は「関西大学北陽高等学校」に名称を変更する。

北陽高等学校は、1925(大正14)年に設立された80年の歴史を有する男子校で、これまでに3万人を超えるOBを世に送り出している。スポーツの北陽としてつとに有名だが、2008年度から共学化とともに教育改革を進める。

関西大学は、これまで併設の高校は1校しかなく、既存の併設校の活性化のためにも、かねてから併設校増設が切望されていた。今回、福武学園から統合の申し入れを受諾することになった最も大きな理由は、福武学園の建学の精神・教育理念への賛同による。すなわち、福武学園は本学の理念である「学の実化」を提唱された故・山岡順太郎学長のご子息、山岡倭氏が創設された学園で、山岡順太郎先



関西大学で行われた調印式(3月15日)で握手する森本靖一郎理事長(写真左)と北陽高の福武道裕理事長(同右)

生の理想とされた教育理念が息づいており、本学の併設校に足るにふさわしい学園と判断したからだ。

現在、合併に向けた具体的な協議を鋭意進めている。特に、関西大学への進学など生徒のニーズに一層応えられるような教育改革を実現するため、同校の歴史と伝統、特色を尊重しながら充実を図る。



関西大学博物館が登録文化財に登録

関西大学博物館として親しまれている「簡文館」が平成18年度の「登録有形文化財(建造物)」の一つに選定され、3月16日、文化庁から発表された。関西大学の建築物では初めての登録であり、学内に現存する建物の中では最古のもの。

簡文館は、1928(昭和3)年に大学図書館として建築され、1955(昭和30)年に増築された。その増築部分が1967(昭和42)年に文化勲章を受章した建築家・村野藤吾氏(1891~1984)の作品であることや、大学の図書館施設として代表的なものの一つであり、大学がそうした建物を保存しようとしたことなどが選定理由となった。

村野氏の設計による大きな増築工事は、関西大学創立70周年記念事業の一環として実施された。現在、博物館の事務室と展示室になっている円形の部分と、「なにわ・大阪文化遺産学術センター」となっている書庫部分がこの時の増築。この円形建物は戦後の急激な学生増に伴い、開架閲覧室として設置され、以後、学生や教職員の教育・研究の中心的役割を果たした。

特別企画展「簡文館ものがたり」を開催

関西大学簡文館が国の登録文化財に登録されたことを記念し、同館内にある年史資料展示室では、4月8日から特別企画展「簡文館ものがたり」を開催。千里山キャンパスには、この簡文館や円神館(現ITセンター)など、村野氏が設計した建物が数多くあることも紹介されている。

簡文館は、図書館から博物館と年史資料展示室を備えたギャラリーへと変貌してきたが、その温もりと親しみ、美しさは今も変わらない。

